

自己を側面に分けて考える

——ロシア・ユダヤ人がロシアを離れるまでの歴史

鶴見 太郎

はじめに

今からおよそ1世紀年前にロシア帝国に多数暮らしていたユダヤ人は、しばしば「ロシア・ユダヤ人」と自らを定義した。それは単にロシアに暮らすユダヤ人という意味である場合もあったが、さらに複雑な意味を持つ場合もあった。つまり、彼らのなかで、「ロシア」と「ユダヤ」がどのように結びついていたのかということも、探求の対象になるのである。

これまでの研究では、他のエスニック集団に関する場合と同様に、基本はユダヤ人である人が、様々な環境とどのように折り合いをつけ、また、ある時点から見切りをつけたのか、といった捉え方でロシア・ユダヤ人についても論じられてきた。ユダヤ人が本質であった、その他のものは仮の姿だというわけである。だが、例えば同じ環境から生まれたレフ・トロツキーが、ユダヤ人としての自己意識を完全に喪失したわけではないにせよ、社会主義革命家として、ロシア社会に溶け込んでいった。つまり、やがて「ロシア」のほうが本質的なものになっていく逆転現象も本来は考えられるのであり、単に「ユダヤ史」や「ロシア史」という既存の枠組みのなかでそうした場合が中心的に扱われてこなかったにすぎない。本稿は、ロシア・ユダヤ人のなかで「ロシア」と「ユダヤ」は、どちらが本質であるかがあらかじめ決まっているわけではない等価のものとして想定する。

自己の多様性については、一般にこれまで「多元的自己」や「ハイブリッド性」などの言葉で議論されてきた。しかし、エスニシティ界限に限らず、自己の多様性という一つの秩序を形作る原理や自己外との関係性については、あまり議論されてこなかった。もちろん、単一的な自己概念が世間一般において優勢である状況において、実際の自己が多面的であることを豊富な事例で示す意義は高い。しかし、それがもし硬直的な自己概念に対するアンチでもあるのだとすれば、単に多面的であることを指摘するだけでは必ずしも硬直的な捉え方を乗り越えたことにはならない。もし多面性のあり方が不変であると想定するならば、やはり自己の内実を固定的に捉えていることには変わらないからである。対他的に自己の様々な側面が状況に応じて使い分けられるという動きを提示するにしても、やはり多様な側面のセットそのものは変化しないと考えることができってしまう。つまり、従来の捉え方をより細分化することにはなっても、大勢としては変わらないことになるのである。

本稿では、これに対して、多元的な自己を前提としたうえで、その先に考察を進める。とりわけ、諸側面 (aspects) が相互にどのように関連しあっているのか (していないのか)、また、それは自己外、あるいは他者の諸側面とどのような関係性を取り結んでいるのかについて考察する。ロシア・ユダヤ人は、その後、今日まで至る歴史において、主に以下の経路をたどっていった。まず、ホロコーストによって大きな打撃を受けたとはいえ、(旧)ロシア帝国領に残り続け、ホロコースト後は主にソ連体制に組み込まれてユダヤ文化の多

くを喪失することになった流れ、次に、パレスチナにおいてイスラエルを建国するシオニズムという流れ、そして、アメリカを中心とした西側に移住する流れ、である。こうした地理的な差異が生まれる背景で、ロシア・ユダヤ人の自己はいかに、どのような要因によって変容していったのか。

1. 自己複雑性とエスニシティ

心理学において、自己の多面性は「自己複雑性」という用語で知られてきた。パトリア・リンヴィル (Patricia Linville) は、弁護士や同僚、ハードワーカー、男性、ベジタリアンといった様々な側面 (aspect) を持つ自己の複雑性と鬱症状との関係性を次のように論じた。自己の複雑性が高い人ほど、1つの側面に対するダメージが、その自己に及ぼす割合は限定的であるため、鬱になりにくい。ここで、複雑性が高いとは、自己が持つ側面の数が多いということだけでなく、諸側面間の区別が明確になっていることも意味する。区別が不明確であると、1つの側面に対するダメージが他の側面に波及しやすくなる。¹⁾

こうした知見に対しては、自己複雑性が高いと、それだけ各側面を統率するための負荷が高くなるためにかえって鬱になりやすいとする研究も提出されており²⁾、鬱との関係性について明確な結論は下されていない。しかしいずれにしても、自己は単に諸側面を持っているというだけにとどまらず、諸側面同士の関係性自体が自己を全体として動かしている要因になりうることは、こうした研究から十分に予感されるのである。

この自己複雑性概念をエスニシティに応用することが、本稿の出発点となる。ロシア・ユダヤ人の例でいえば、便宜上「ロシア・ユダヤ人 = русский еврей = Russian Jew」と呼ばれる人は、ロシア的側面とユダヤ的側面を持ち合わせていることになる。心理学では、さらに諸側面を包括する側面 (包括的自己概念) が想定されることもあるが³⁾、ここではそれは想定しない。ロシア・ユダヤ人は、こうしたエスニック (ナショナル) な側面に加えて、例えば、商人としての側面、父親としての側面、特定のユダヤ教コミュニティの成員としての側面など、様々な非エスニックな側面も持ち合わせているだろう。本稿では、議論を簡潔にするために、主にエスニックな諸側面に照準を合わせる。

では、自己のなかで、エスニックな諸側面はいかなる関係性を相互に結びうるのか。その類型としては以下の4種が考えられる。

- ①併存型：各側面は必ずしも相互参照されることなく併存し、場面による使い分けがなされる。
- ②融合型：境界は曖昧で、第三のものを作り出しつつあるが、異種混交的であることが

¹⁾ Patricia W. Linville, "Self-Complexity and Affective Extremity: Don't Put All of Your Eggs in One Cognitive Basket," *Social Cognition* 3, no. 1 (1985): 94-120.

²⁾ 詳細は以下を参照。木谷智子・岡本祐子「自己概念の多面性と心理的well-beingの関連」『青年心理学研究』27巻2号(2016年)、119-127頁。

³⁾ 榎本博明「『自己』の心理学——自分探しへの誘い」(サイエンス社、1998年)、29-66頁。

自覚されている。

- ③緊張型：各側面は互いに矛盾しつつ辛うじて併存している。
- ④相補型：各側面は相互に自律しつつ、それぞれの特性が相互に補完しあう関係にあることが意識されている。

ロシア・ユダヤ人の事例でいえば、①の初期の例は、ロシア帝国で活躍した啓蒙主義ヘブライ語詩人であり、ロシア語・ドイツ語・ヘブライ語ジャーナリストであったユダ・レイブ・ゴルドン (Juah Leib Gordon) が挙げられる。彼は1862年か63年に著わしたヘブライ語の詩「目覚めよ我が同胞！」において、次の有名なフレーズを残した。「通りでは人間として、家ではユダヤ人として生きよ」。この詩のなかで「ロシア」という語は登場しないが（「ヨーロッパ」は登場する）、ここで「人間」は必ずしも抽象的な文明人のような意味に限られているわけではない。彼は、ドイツ発のユダヤ啓蒙主義（ハスカラー）の教えに従い、居住国家の言語や文化を身につけ、忠誠を誓うことが、ユダヤ人に啓蒙をもたらすことであると説き、ロシア語とヘブライ語のバイリンガルを推進しようとしていたからである。⁴⁾ その意味で、彼の自己のなかには、ユダヤの側面のみならず、ロシアの側面が備わっていたと見ることができる。ただ、両側面の関係性については、彼の居住国家が偶然ロシアだったということ以上に必然的なものは見当たらない。居住国家がドイツであれば、ドイツ文化やドイツ国家への忠誠について彼は論じていただろう。つまり、両側面のあいだに具体的で必然的な関係性を見いだすことはできない。まさに、外ではロシア、内ではユダヤ、という格好で両者の棲み分けがなされていた、つまり併存していたのだと解釈できるだろう。現代イスラエルの例でいえば、1990年代を中心にイスラエルにやってきた旧ソ連系のユダヤ移民におけるロシアの側面とイスラエルの側面（イスラエル国民としての側面、ないし移民後しばらく経ってからのヘブライ語・イスラエル文化に関する側面）も、併存型である。イスラエルにおいて、（少なくともアラブ文化と比べて）ロシア文化は明確に蔑まれたり敵視されたりしているわけではない一方で、旧ソ連諸国の経済状況が厳しかった90年代においてロシアとのつながりを持つことがイスラエルにおいて特に重宝されたわけでもなく、ロシア文化は旧ソ連系移民のあいだのみで回っていた。⁵⁾

②について、ロシア・ユダヤ人に関しては、必ずしも明確に見いだせないが、ドイツ・ユダヤ人に関してはある程度見いだすことができる。19世紀のドイツ・ユダヤ人のなかには、ドイツ文化の至高形態である「教養」(Bildung) をユダヤ人が担っているとの意識を持つ者が出現していた。彼らは、既存の、例えば隣人のドイツ人に同化したわけではないが、ユ

⁴⁾ Michael Stanislawski, *For Whom Do I Toil? Judah Leib Gordon and the Crisis of Russian Jewry* (New York: Oxford University Press, 1988), 49–52. そのほか、先行研究で提示されている例としては、帝政末期に活躍した弁護士ゲンリヒ・スリヨスベルクが、よきユダヤ人であることとよきロシア臣民であることは矛盾しないと述べていることなどが挙げられる。Eli Lederhendler, “Did Russian Jewry Exist prior to 1917?” in *Jews and Jewish Life in Russia and the Soviet Union*, ed. Yaacov Ro'i (London: Routledge, 1995), 24.

⁵⁾ イスラエルの旧ソ連系移民については、さしあたり次を参照。鶴見太郎「旧ソ連系移民とオスロ体制——イスラエルの変容か、強化か」今野泰三・鶴見太郎・武田祥英編『オスロ合意から20年——パレスチナ/イスラエルの変容と課題』(NIHU イスラーム地域研究、2015年)、127–138頁。

ダヤ人としての独自性を保存し続けようとしていたわけでもなく、これからのドイツの、少なくとも文化的な意味での中核を自ら養成していくとの意識を持っていた。⁶⁾ この場合、ドイツ的側面とユダヤ的側面は、現状では一応別のものとされていながら、区別は非常に曖昧になっており、多くが重なり合っていた。

③についてもドイツ・ユダヤ人の例が典型的である。特に19世紀も終盤になると、ドイツにおいては、ユダヤ人のドイツ化が進んだ反動とドイツ・ナショナリズムの発展にともない、反ユダヤ主義が激化していった。ドイツの歴史家ハインリヒ・フォン・トライチュケは、「ドイツの土壤に二重のナショナリティは存在しえない」と述べ、ドイツ民族のエスニックな性格を強調した。⁷⁾ こうした観点を内在化した場合、ドイツ的側面とユダヤ的側面が自己のなかで共存することは困難になり、常に緊張状態に置かれることになる。再びイスラエルの例では、イスラエル国籍を持つパレスチナ人にとって、イスラエルの側面とパレスチナの（もしくはアラブ的）側面は、ある程度の使い分けのような状況は見られる（だからこそ辛うじて保たれている）ものの、基調としては緊張状態にある。⁸⁾

一方、④の場合、諸側面は相互に明確に区別されていながらも、このような緊張関係にはならず、むしろお互いがお互いを必要とする、あるいはお互いがお互いを引き立て合うような関係になる。本稿で特に着目するのはこうした関係性であり、実例については以下で示していく。⁹⁾

本稿の目的は、第1に、以上のような類型に沿うような——特に④のような——ロシア・ユダヤ人が存在した事実を提示すること、そして第2に、そうした諸側面の関係性がいかなる経緯のなかで変化していくのかを探ることである。それはつまり、諸側面が他者（の諸側面）といかなる関係性を取り結ぶのかという問題である。

2. 帝政末期・崩壊期のロシア・ユダヤ人

本稿が対象とするロシア・ユダヤ人は、概して言えば以下のような人々である。1897年にロシア帝国で行われた最初で最後の国勢調査において、イディッシュ語を「母語」とする人口は約520万人であり、「ユダヤ教徒」と答えた者の97%がイディッシュ語を「母語」と答えているから、この数字をユダヤ人口の近似値と考えてよいだろう（当時の調査では、「民族」の項目は人口に膾炙していないとの判断から調査対象から見送られた）。

このことがまず示すように、ロシア帝国のユダヤ人といっても、みなロシア語を話すわ

⁶⁾ Paul Mendes-Flohr, *German Jews: A Dual Identity* (New Haven: Yale University Press, 1999), 8–16. また、ジョージ・L・モッセ『ユダヤ人の〈ドイツ〉』（講談社、1996年）も参照。

⁷⁾ Mendes-Flohr, *German Jews*, 18.

⁸⁾ 例えば次を参照。Rhoda Ann Kanaaneh, *Surrounded: Palestinian Soldiers in the Israeli Military* (Stanford, CA: Stanford University Press, 2009).

⁹⁾ その他の典型例としては、東南アジアの華人や、ロシアのコサックの例が挙げられる。次を参照。鶴見太郎「想像のネットワーク——シベリア・極東ユダヤ人におけるアイデンティティのアウトソーシング」若林幹夫・立岩真也・佐藤俊樹編『社会が現れるとき』（東京大学出版会、2018年）、293–297頁。

けではなく、ある程度ロシア語能力を身につけていたのは、ロシア政府が設置した学校に通った者に限られたから、まだ20世紀初頭の時点では、都市部の一部に限られていた。文化的にも、ポーランド地域やポーランド人の多い地域では、ポーランド文化との距離のほうが近い場合も多かったし、少数ながら、ウクライナ文化に馴染みのあったユダヤ人も存在していたから、ドイツ・ユダヤ人と同じ要領でロシア・ユダヤ人を考えるわけにはいかない。

特に、これほど多数のユダヤ人がロシア帝国に居住するようになったのは、18世紀末のポーランド分割によって、それまでユダヤ人が多く居住していたポーランド・リトアニア王国の領域の多くをロシア帝国が支配下に置いたからであり、ロシア臣民になってからの歴史は1世紀程度にすぎなかったのである。

それでも、事実上ロシア化していったユダヤ人に対して法的な制限を緩和するという政府の政策や、そうした方向性に歩調を合わせたユダヤ人の有力者の影響で、ロシア語を使い、ロシア社会と関わりを持つようになっていったユダヤ人は次第に増加した。ロシア帝国の南下政策に従って、ウクライナ地方、特に現在のウクライナ南部・東部にユダヤ人が移住していった動きも、「ロシア・ユダヤ人」としてのアイデンティティを持つ者が増えていった背景にある。¹⁰⁾

本稿で対象とするのは、ロシア革命前後の時期における、こうした流れのなかでロシア的側面とユダヤ的側面を自己のなかに同居させるようになった人々、特に自由主義系の流れに属する人々である。ロシア革命からソ連に至る流れのなかで主役となっていく社会主義系の人々のなかでもユダヤ的側面にこだわりを見せる人々は存在したが、彼らがロシア的側面というよりは、社会主義者としての連帯を重視していたと思われることもあり、ここでは対象としない。

自由主義系のロシア・ユダヤ人の活動家は、主に、1905年革命以降の体制のなかでロシア自由主義の中心を担うことになった立憲民主党（「カデット」）周辺で活動しつつ、ユダヤ人民グループという政治結社に集っていたユダヤ人自由主義者と、ロシア帝国における政治に関与しつつ、パレスチナにおいてユダヤ人の民族的拠点を樹立しようとしていたシオニスト（特に「総合シオニスト」）の2つの流れが挙げられる。¹¹⁾

彼らは、1917年の10月革命までは首都ペテルブルクを中心に活動していたが、10月革命以降にロシアが内戦状態になると、自由主義者にしてもシオニストにしても数年のうちに西欧などへ亡命していくことになった。彼らが拠点を置いたベルリンやパリは、非ユダヤ人のロシア人、特に赤軍に対する白系ロシア人が拠点にしていた都市でもある。つまり、彼らは、いわゆるロシア人と同様の動きを見せており、ロシア帝国崩壊後もロシア人とし

¹⁰⁾ 「ロシア・ユダヤ人」をめぐるこうした背景については、Lederhendler, “Did Russian Jewry Exist prior to 1917?” 16-27を参照。また、ロシア・ユダヤ人に関する基本情報については、鶴見太郎『ロシア・シオニズムの想像力——ユダヤ人・帝国・パレスチナ』（東京大学出版会、2012年）第1章も参照。

¹¹⁾ 自由主義者に関しては次を参照。Yitzhak Maor, *Sheelat ha-yehudim ba-tenu'ah ha-liberalit ve-ha-mahpakhnit be-rusyah* (1890-1914), Yerushalaim: mosad bialik (1964); Christoph Gassenschmidt, *Jewish Liberal Politics in Tsarist Russia, 1900-1914* (New York: New York University Press, 1995). 総合シオニズムについては、鶴見『ロシア・シオニズムの想像力』を参照。

ての側面を持ち続けていたことがうかがえる。

3. ロシア性とユダヤ性をつなげる言説

では、彼らのなかでロシア的側面とユダヤ的側面はいかに結びついていたのか。すでにロシア社会と関わりながら、ユダヤ人としても活動していた彼らにおいては、両側面のつながりは、上記の類型でいえば、少なくとも併存型であった。しかし、もしそうであるならば、仮にロシアを離れて、例えばパリに移住するならば、フランス的側面などがロシア的側面に取って代わっていただろう。ところが、上記のように彼らはいわゆるロシア人と関わりを持ちながら活動を続けていた。シオニストの場合は自由主義者と比べるロシア界限とは距離を取っていたが、それでも、例えば1934年まで、パリにおいてロシア語シオニスト紙を刊行し続けていた。つまり、彼らのなかで、ロシア的側面とユダヤ的側面は偶然併存していただけでなく、何らかの必然性をもってつながっていたのである。以下では、そうしたつながりが特に見えやすい自由主義者の言説から、そうしたつながりの具体的なあり方を見ていく。¹²⁾

(1) 西欧化推進者

次の引用は、ロシア語週刊紙『エヴレイスカヤ・トリビュナ』(ユダヤ週報)に掲載された「ロシアの道について」という文章の一節である。この週刊紙をパリで1920年に創設したマクシム・ヴィナヴェル (Maksim Vinaver) は、立憲民主党およびユダヤ人民グループの創設メンバーであり、10月革命後に白系ロシア人がクリミアで樹立した地方政府の外務大臣も務めたことのある弁護士である。

(…) 迫害され、どこでも無権利状態であるユダヤ人は常に西欧主義者であり、ヨーロッパ人である。(…) しばしばロシア人以上にヨーロッパ人であり、時にヨーロッパ人以上にヨーロッパ人である。(…) ユダヤ人は都市民であって、街の出身であり、野原の出身ではない。(…) インテリであり、商人であり、都市の人間であり、西欧の人間である。(…) ロシア・ユダヤ人は西欧主義者であるのみならず、文化的である。西欧や民主主義、「独自性」に対する「都市」を擁護するだけでなく、常にそれを疲弊させようとする「スキタイ人」に対する文明を擁護するだろうし、常に「ヨーロッパのロシア」を擁護し、「ヨーロッパに相対するロシア」を擁護することは一切ないのだ。¹³⁾

ここに表れているのは、後進的なロシアだからこそユダヤ人の出番があるというユダヤ人

¹²⁾ 本節と4節、5節の史料(特に引用部分)の多くは、次の拙稿が初出である。鶴見太郎「ナショナリズムの国際化——ロシア帝国崩壊とシオニズムの転換」赤尾光春・向井直己編『ユダヤ人と自治——中東欧・ロシアにおけるディアスポラ共同体の興亡』(岩波書店、2017年)、163–185頁。

¹³⁾ V. Mirskii, “O putiakh Rossii,” *Evreiskaia tribuna*, no. 61 (1921), 2.

とロシアとの関係性に関する認識である。ピョートル大帝の西欧化政策以来、ロシアが西欧化すべきか、それともスラブ民族としての独自性、特にヨーロッパ的側面とアジア的側面の両方を兼ね備えたあり方を追求すべきかをめぐる西欧派とスラブ派の対立が、ロシアの思想界において定番の構図となっていた。この構図のなかで、特に自由主義者はボリシェヴィキを野蛮な分子と見なす傾向があり、西欧派の側につくことが多かったから、こうした主張は、パリの白系ロシア人の界限では特に意味を持つものだったのだろう。

(2) 経済的役割

伝統的に、非ユダヤ人のなかでのユダヤ人ステレオタイプにおいて、ユダヤ人といえは経済界における存在感の高さが即座に連想されるが、自由主義ユダヤ人は、ある意味でそのステレオタイプを利用している場合があった。「ロシアの経済的復興事業におけるユダヤ人の役割」と題した記事の次の一節はその典型例である。

ロシアの産業・商業活動のなかでその中核にユダヤ人を含まない領域は存在しない。¹⁴⁾

この著者が本音としてどのように認識していたかは定かではないが、当時のユダヤ経済の状況に鑑みると、これはやや誇張であるように思われる。確かにどの領域の中心にも、ユダヤ人は1名以上は含まれていただろうが、この表現はロシア経済がユダヤ人によって回っているかのような印象を植え付けるものだろう。だが、実際には1870年代に本格的に開始されたロシアの工業化のなかで、ユダヤ人の経済的機能は低下していった。ユダヤ人はロシアにおいて、商業や手工業に従事している場合が圧倒的に多く、これは8割が農民層であったロシア帝国の人口のなかで突出していた。だが、商業に関しては、小商店や行商も含まれ、それは鉄道の発達によって再編を余儀なくされた。手工業はロシアが資本主義経済に変遷していくなかで増大した大工場にはかなわなかった。ユダヤ人は大工場を中心とした新経済には必ずしもうまく適応することができず、都市には失業者が溢れていった。それがユダヤ人のあいだで社会主義運動が発達した背景でもあった。だがここでの引用は、そうした現実をさておき、ともかくユダヤ人はロシア経済にとって欠かせない存在であることをアピールしている。

(3) ポーランド・ナショナリズムとの関係

1905年革命は、それによってロシアで初めて議会(ドゥーマ)が開かれるなど、ロシアが立憲君主制に移行した契機だった。そしてそれは、諸民族運動に対する制限が緩和されることで、ポーランド人をはじめとして、自治(帝政からの自由)を求める動きが活性化することにもつながった。例えば、ヴィナヴェルらが刊行していた『スヴォヴォダ・イ・ラヴェンストヴォ』(自由と平等)紙は、1907年のある号で、ポーランド人の政党「コロ」が掲げる自治計画が、ユダヤ人の民族的権利に否定的であることへの警戒を表明してい

¹⁴⁾ A. Mikhel'son, "Rol' evreev v dele ekonomicheskogo vozrozhdeniia Rossii," *Evreiskaia tribuna*, no. 9 (1920), 3.

る。帝国議会の承認なしに、自治地域の憲章は効力を持たないとその記事は牽制するのである。¹⁵⁾ このことは、ロシア帝国という大きな枠組みが控えている場合と、ロシアから実質的に切り離されたポーランド地域においてポーランド人のみと対峙する場合とでは、前者のほうが帝国のどの地域においても少数派であるユダヤ人にとっては都合がよい（ましである）という意識の表れである。この点は、ロシアの文化的特性とは特に関係なく、いわば権力政治の次元に関わるものであるため、上記2点とは性質が異なるが、ユダヤ的側面とロシア的側面が、当時の具体的な政治状況のなかで結合する方向に後押しするものであったことには違いない。

(4) ロシア人の側の認識

こうしたユダヤ人の認識は、必ずしもユダヤ人の「片思い」にすぎなかったわけではない。ややズレはあるものの、ロシア人の側でも呼応する認識は存在していた。まず大前提として、ロシア帝国の多民族性について、1906年憲法体制下で事実上の首相を務めたこともあるロシア人（父親はオランダ人）の政治家セルゲイ・ヴィツェ (Sergei Witte) は、1922年に出版された回想において次のように述べていた。

偉大なロシア帝国は、その千年の存在のなかで、ロシアに住むスラブ諸部族が武力や腕力、あるいは別の手段によって他の諸民族の大衆全体を徐々に吸収していく過程において形成された。こうした意味で、多様な民族の複合体としてのロシア帝国は生まれたのであり、それゆえ、本質的には、ロシアというものは存在せず、ロシア帝国のみが存在するのである。¹⁶⁾

つまり、ロシア人自身が、ロシア人と他の帝国の諸民族を相互補完的な存在として捉えているのである。この引用部分は、実は後述するシオニストのダニエル・パスマニク (Daniel Pasmanik) が著書『ロシア革命とユダヤ人』(1923年)のなかで自らの見解を代弁するものとして引用していたものであるから¹⁷⁾、ユダヤ人の側でもロシア人のこうした認識を意識していたことは確かだろう。

なかにはユダヤ人を名指ししてロシア人との相互補完性を訴える論者もいた。その筆頭がロシアの宗教思想家であるヴラディーミル・ソロヴィヨフ (Vladimir Solovyov) やニコライ・ベルジャーエフ (Nikolai Berdyaev) である。『エヴレイスカヤ・トリビュナ』には、ソロヴィヨフの以下の文章が引用されている。

ユダヤ人は我々に常にユダヤ流に接してきたが、反対に我々キリスト者はユダヤ教に対してキリスト教的に接することを未だに学んでいない。彼らが我々に対して自らの宗教的掟を破ることは一度もなかったが、我々は彼らに対して常にキリスト教の教えを破ってきたし、いまも破っているのである。(…)キリスト者とユダヤ人の目的は

¹⁵⁾ “Proekt avtonomii Pol'shi,” *Svoboda i ravenstvo*, no. 23 (1907), 1–5.

¹⁶⁾ Graf S. Vitte, *Vospominaniia: tsarstvovaniie Nikolaia II*, Vol. 1, Berlin (1922), 116.

¹⁷⁾ D. S. Pasmanik, *Russkaia revoliutsiia i evreistvo (bol'shevizm i iudaizm)*, Parizh (1923), 245.

同じである。すなわち、地上に神の王国を実現することである。¹⁸⁾

このソロヴィヨフの論理は、世俗的な傾向が強かったユダヤ人自由主義者の世界観と必ずしも噛み合うものではなかったはずだが、それでもロシア人がほかではなくユダヤ人を重視したことが彼らの琴線に触れたのである。

4. 2つが離れるとき

少なくとも自由主義者のあいだでは相思相愛であることが想定されていたユダヤ的側面とロシア的側面の関係性は、シオニストにおいては次第に並存型、さらには緊張型へと変化していくこととなる。

他で論じたように、シオニストはそれまで特殊な集合性として理解されがちであった「ユダヤ人」という概念を「ネーション」概念で捉えた点に新しさがあった。「ネーション」は、ある程度自己完結することが想定される概念であるから、自己のなかのユダヤ的側面とロシア的側面は距離が離れたり、不用意に近づいた場合は緊張関係になったりすると考えられる。それでも、少なくとも帝政期においては、ロシア帝国という枠組みを前提として活動しており、他地域のユダヤ人との関係においても、「ロシア・ユダヤ人」としての意識を失っていたわけでもなかった。¹⁹⁾ あくまでもシオニストになる以前、もしくは自由主義者と比べて2つの側面の距離が遠くなったということである。

そうしたシオニストにおいても、その2つの距離はいくつかの契機によってさらに離れていくことになり、時に緊張関係に入ることになった。それらは主に以下の3つの局面においてであった。

(1) 民族政治の進展

ロシア帝国における自由主義系シオニスト指導層の若手の筆頭であったヴラディーミル・ジャボティンスキー (Vladimir Jabotinsky) は、帝政期の1911年に、ロシア人の有名な月刊誌である『ルスカヤ・ムイスリ』(ロシア思想)のなかで次のような主張を行っていた。

定住区域〔帝国内でユダヤ人の居住がそのなかに制限されていた区域；今日のリトアニア、ベラルーシ、ウクライナ、モルドヴァに多く重なる〕内のあらゆる場所がそうであるように、そうした混住環境では、隣接する文化のなかで特定の文化に肩入れすることは残りの隣人の間で反セム主義を呼び起こすことになる。さらに危険であるのは、大ロシア〔ロシア人は自らを「大ロシア」、ウクライナのことを「小ロシア」と呼んでいた〕文化の完璧な担い手という役回りをほぼ唯一のものとして引き受けてしま

¹⁸⁾ A. Diu-Shaila, "Sud'ba Khristianstva i Evreiskii vopros," *Evreiskaia tribuna*, no. 118 (1922), 2-3. 訳文の前半は、赤尾光春「帝政末期におけるロシア作家のユダヤ人擁護活動—ソロヴィヨフ、トルストイ、ゴーリキー、コロレンコを事例として—」『ロシア語ロシア文学研究』第39号(2007年)、43頁より引用。

¹⁹⁾ 鶴見『ロシア・シオニズムの想像力』。

うことであろう——それは即座に、棄てられることになる地元民すべてに対する挑発と同義になるだろう。²⁰⁾

つまり、当時の状況において、特定の民族に肩入れするのは傀儡としての疑念を呼ぶため、どの民族とも等距離を保っておくことが帝国で生き抜くためには賢明だというのである。このことは、自己のなかにおいてエスニックな側面をなるべく一本化——つまりユダヤ的側面のみに——しようとする誘因として働いただろう。

(2) 経済関係の変化

すでに指摘した、ロシアの工業化に伴うユダヤ人を取り巻く経済構造の変化は、側面同士の関係性にも影を落としていたようである。先述のバスマニクは、すでに1904年に「ユダヤ人の経済状況」と題した連載(1905年に書籍として刊行)において、ユダヤ人を取りまく厳しい経済状況を論じていた。それによると、ロシアにおけるユダヤ人の経済状況は、これ以上ないほど劣悪である。その背景として彼が挙げるのは、ユダヤ人のほとんどが後進的な経済活動にとどまっているという状況である。ユダヤ人は労働搾取の度合いが最も強く、発展の幅が小さい手工業に従事している。大資本による生産は教養のない労働者を必要とし、生活水準の低い農村からの労働者と競争することになるために、ユダヤ人にとっては不利なのだという。²¹⁾

こうした条件は、ユダヤ人が一方的に搾取されるという感覚につながるものであり、相補的なユダヤ・ロシア関係を描きにくくすることになっていただろう。

(3) 暴力の激化

シオニスト運動の契機は、1881年にウクライナ南部で始まったポグロム(反ユダヤ暴動・虐殺)が発端になっていたから、ユダヤ人に対する暴力がユダヤ人がロシアから離れる背景にあったこと自体は自明となっている。ただ、重要なことは、それは初めてのポグロムではなかったし、1903年から1906年にかけて、さらに規模の大きいポグロムが発生するなど、ポグロムが何度も発生していたにもかかわらず、シオニストでさえ、開拓者精神に溢れる一部の若者を除いて、すぐにロシアを離れようとはしていなかったことである。

しかし、10月革命以降の内戦期において発生したポグロムは、ポリシェヴィキとユダヤ人を同一視する偏見を背景として、白軍やウクライナ・ナショナリストからの報復的なユダヤ人迫害が、それまでとは桁違いの規模で発生することになった。国家的秩序の崩壊に伴って、略奪的な暴力も増え、抑えが効かなくなっていた。こうした事態は、「ロシア」が全面的にユダヤ人に対して敵対的になったことを予感させやすくだらう。

1922年に、1919年まで主にペテルブルクで刊行されていたロシア語シオニスト紙『ラスヴェト』(黎明)はベルリンで再開された。そのある記事は次のように当時の状況を描写している。

²⁰⁾ V. Zhabotinskii, "Pis'ma o natsional'nostiakh i oblastiakh: evreistvo i ego nastroyeniia," *Russkaia mysl'* 32, no. 1 (1911), 112–113.

²¹⁾ D. Pasmanik, *Ekonomicheskoe polozhenie evreev v rossii* (Odessa: Kadima, 1905).

我々——ロシア・シオニスト——は今日、静かな哀しみと痛みをもって、それら〔1917年革命時の〕輝かしい時代を思い起こす。(…)我々は、あらゆるロシア・ユダヤ人と同様に、虐待され、破壊された陣営にいる。だが、我々は、火中から我々のトーラーを運び出したのだ。²²⁾

以上のように経済や政治面で描かれている状況は、いずれもユダヤ的側面とロシア的側面の相補関係を破壊する方向にあった。様々な状況をどのように解釈するかは個人や組織の主観に拠っていたから、皆が総じてロシアを捨てたわけではなかったにせよ、長期的にはやはりロシアから離れる大きな要因となっていただろう。

5. ただし、簡単には離れない

しかし、まさに主観は複雑であるから、ユダヤ人のなかには様々な揺れ動きが見られ、単線的にロシアから離れる歴史が見られたわけではなかった。

例えば、パスマニクの場合、内戦中のボグロムに関して、むしろ自由主義者たちと同様に、ロシア国家が再建されれば収まると見立てていた。帝政期においてはロシア的側面との距離を一定程度取っていたように見える彼は、第1次大戦が勃発するとロシアに接近していく。まず、家族と居住していたジュネーブを単身離れ、ロシア軍に医師として従軍した。10月革命後は、白軍の側につき、ヴィナヴェルなどとクリミアで行動を共にする。クリミアを追われた後、パリで白系ロシア人のあいだで活動を続けた。シオニストとの関係は切れてしまったものの、自己意識としてはシオニストであり続けた。彼の信念では、ロシア帝国の復活こそが、それと運命をともにするユダヤ人にとっての最良の秩序を担保するのだった。1929年には、最後の著書のなかで、倫理に重きを置く「ユダイズム」と美学に重きを置く「ヘレニズム」との相互補完性について語った。²³⁾ 何がこの「ヘレニズム」を担うのかは明示されていないが、いずれにしも、何かとつながることで生きるという方針自体は模索され続けていたと見ることができよう。

ここから示唆されるのは、エスニックな諸側面は決して1種類しかない既製品を各自が分け持っているということではなく、諸個人によって諸側面の特性が少しずつ異なっているということ、そしてそれは、その側面が持っている、あるいは想定している社会的つながり（ネットワーク）次第であるということである。上述のパスマニクの場合、彼のユダヤ的側面は、ヘレニズム的側面との関係のなかで成立していたし、ヘレニズム的側面も、多分に彼の想像のなかのものである。ヴィナヴェルら自由主義者が持っていたロシア的側面も、汎用性の高いステレオタイプ的なロシアというわけではなく、やはり独自のつながりのなかで維持されるロシア的側面であった。『エヴレイスカヤ・トリビュナ』では、1920年に前述の宗教思想家ソロヴィヨフの没後20周年を記念した特集が組まれている。

²²⁾ S. Gepshtein, "Piat' let," *Rassvet*, no. 9 (1922), 2.

²³⁾ パスマニクについては次を参照。Taro Tsurumi, "Jewish Liberal, Russian Conservative: Daniel Pasmanik between Zionism and the Anti-Bolshevik White Movement," *Jewish Social Studies* 21, no. 1 (2015): 151–180.

その巻頭を飾った記事でヴィナヴェルは、ソロヴィヨフが死の床でユダヤ人のために祈ったエピソードを紹介し、次のように彼を絶賛した。

西欧人にとって、ロシア世界はこれからも長きにわたって謎の連続であろうし、その一つが(…)ロシアのユダヤ人問題である。なぜ継母的な母国からのそれほどまでの敵意に耐えるこの民族〔ユダヤ人〕は、それほどまでの精神的な熱望とともに、またそれほどまでの輝かしい未来への希望に満ちて、それ〔ロシア〕に引き戻されるのか。その希望の担保は何か。最大の理由は、ロシアの民族的な天才を最も明白に具現化したロシアの人々の姿にある。彼らのなかにこそ我々のロシアとのつながりがあり、彼らのなかにこそ、我々の未来の担保がある。彼らの一人、それがソロヴィヨフである。²⁴⁾

ヴィナヴェルが持つロシア的側面がつながっているロシア(人)は、ポグロムの加害者とは別物であった。それゆえヴィナヴェルのなかでロシア的側面は、ユダヤ的側面と矛盾することがなかったのである。

おわりに

自己複雑性の観点からエスニシティにまつわる諸事象を検証していくことは、次の2つのことを意味する。第1に、数ある自己の側面の1つとしてエスニシティを捉えることで、自己のなかでのエスニシティを特権化(=エスニシティによって個人の行動の大枠を説明してしまうこと)せず、また、エスニックな側面が2つ以上ある場合も、側面間の優劣や主従関係はあらかじめ想定しないこと。したがって、諸側面同士の関係性や相互作用についても検証する必要が発生する。

第2のポイントは次のことである。心理学の自己複雑性理論は、基本的には自己内部について議論しているように見えるが、実のところ、外部との関係が、自己のどの部分まで及ぶか(他の側面にも浸透して鬱になるか否かなど)を検討している点で、自己の側面と外部との関係を論じる方向に開かれている。エスニシティに関してこのことを敷衍するならば、エスニックな側面を、他者の同様の側面や地域コミュニティ、国家、諸組織など、関連する社会的な諸次元との関係のなかで捉えるということである。本稿で論じたロシア・ユダヤ人の自由主義者は、特に(旧)ロシア帝国のユダヤ人全体(あるいはその一部)とのつながりのなかで自己のユダヤ的側面を保持し、同時に、ロシアの自由主義勢力や国家としてのロシア、あるいはロシア文化とのつながり、すなわちネットワークとのなかで自己のロシア的側面を保持し、またそれとの関係でユダヤ的側面が意識されていた。その結果、彼らのユダヤ的側面は、彼らのロシア的側面とよく合致するものだったのである。つまり、自己のなかでの諸側面の特性やそれら同士のつながりは、外部とのネットワークの関数でもあった。いうまでもなく、ここで出現する「ロシア」は多分に主観的なものであるが、

²⁴⁾ M. Vinaver, "Pamiati Vladimira Solov'eva," *Evreiskaia tribuna*, no. 34 (1920), 1.

ある程度呼応するロシア人が存在した点で、特定のロシア人との間主観として成立していたといえる。だからこそ、自由主義者においては、一部での反ユダヤ主義の激化や経済状況の悪化が自動的に彼らにとっての自己矛盾につながるわけではなく、依然としてロシア的側面とユダヤ的側面はプラスにつながり合うことができたのである。一方、シオニストは、両側面を矛盾とまでは捉えていなかったものの、やや距離を取るようになっていた。その際、彼らはより雑然とした意味で「ロシア」を捉えるようになっていた。しばらくはその限りでもロシアでの居住に問題はなかったが、さらに、経済的側面や政治状況、そしてそれまでとは桁違いの暴力に起因するロシア的なものに対する不適応感・不信心は、次第に自己のロシア的側面とユダヤ的側面の同居を難しくしていった。

従来のように、ロシア・ユダヤ人をあくまでも基本はユダヤ人である者として捉える場合、こうした社会のなかでのつながりや自己のなかでのせめぎ合いは一切看過されてしまう。漠然とした反ユダヤ主義の激化や経済状況の悪化という条件は、確かに全体の趨勢ではロシアを出るユダヤ人の増加を帰結していたから、従来の方と本稿の見方が、大勢に関する結論を異にするわけではない。しかし、どのユダヤ人もユダヤ人として同じ基礎を持っていることを想定することで集合主義的な発想（「ユダヤ民族とロシア民族の関わり合いの歴史」といった捉え方）と地続きである従来の方に対して、本稿の観点は次のような利点を持つだろう。

第1に、より実態に即した諸個人のレベルで、エスニック間関係、あるいは国際関係のメカニズムを捉えることができる。例えば、同様の条件のなかで、個人による違い（例えば移民の有無や移民先の違いなど）が生まれる要因も見えやすくなるだろう。従来の方では、個人の内部はブラックボックスとなり、漠然とユダヤ人として好都合／不都合な社会状況か否かという観点からしか個人の動きを捉えることができないが、自己の諸側面を社会的なネットワークのなかで捉えることで、その個人が持っているネットワークの組み合わせという観点から個人の動きを見ることになるため、「ユダヤ社会」「ロシア社会」という雑然とした単位ではなく、より実態に即した社会の多様性のなかで個人の動きを捉えることができるようになるだろう。それは経済的な適合性などの合理主義的な観点にとどまらず、例えばユダヤ人を重視するキリスト教思想という文化的特殊性のなかで発生する意味という次元に着目することも含む。

第2に、長い時間軸で諸個人がたどる経緯をより深く理解することができるようになるだろう。ロシア・ユダヤ人の例に則して考えるならば、移民先でのホスト社会との関わり方の違いが見えやすくなるだろう。ここでは見通しを述べるにとどめるが、主要な移民先であったアメリカの場合、アメリカ社会は、ロシア同様に多民族性を前提としたものであり、また「ユダヤ・キリスト教文明」という概念がアメリカ文化のなかにもあることもあり（さらにいえば、ユダヤ人との関係性についてはソロヴィヨフに似た考え方をする福音派も多いことから）、アメリカ的側面を自己に取り込んでもユダヤ的側面との相性はよかっただろう。

これに対して、パレスチナに移住したシオニストは、当初はアラブ人（実際にはユダヤ教徒のアラブ人も少数含まれていた）が多数派である現地社会に溶け込もうとする動きも見られたが、本格的にアラブ的側面を自己に取り込もうとしたかは疑問である。主流派であった労働シオニスト（社会主義シオニスト）は、労働者としての側面でもってアラブ人

労働者とつながりを持つとしたと見ることはできる。実際にアラブ人と共同の労働組合が設置されたことはあった。だが、ヨーロッパ系ユダヤ人との賃金の格差は大きく、経済状況も異なったことで、こうした動きはシオニストの「片思い」である場合が多く、挫折していくことになった。

また、シオニストのなかには、そもそも他者と具体的につながることで生きるというあり方そのものをやめることを意識するようになった者もいた。帝政期から、他者に評価されるか否かを、つまり、自己弁護的に生きるあり方を批判する向きがシオニストのなかに生まれていた。²⁵⁾ その主要論者の一人は帝政期のパスマニクであったが、彼の場合は前記のように、再び他者との関わりのなかで生きるあり方に目覚めたようではある。しかし、それは例外であって、他のシオニストはそのまま、民族的な意味では孤立主義的な生き方を是とするようになっていったように思われる。シオニズムのなかで前景化していく軍事の重視はその一環であるだろう。²⁶⁾ 軍事は自己／他者、あるいは敵／味方を明確に区別する思考であるから、ネットワークの組み合わせとして自己を成立させる考え方には馴染みにくい(典型例としては二重国籍者への猜疑心が挙げられる)。ポグロムに対する自衛組織はロシア帝国においてすでに生まれていた。労働シオニストも次第に軍事を重視していったし、ロシア語圏に彼らよりも長くとどまっていたパスマニクと同じ流れである修正主義シオニズムは、シオニズムのなかでも自衛によるユダヤ人国家の成立を最も重視していた流れである。つまり、ネットワークのなかでエスニシティを成立させるというあり方そのものが(もちろん用語法は本稿とは違っていても)、当事者においても議論の対象になりえたかもしれない、ということである。それはつまり、**「ユダヤ」**は他者との関わりのなかでこそ成立し持続するのか、それとも、他者の影響から保護しなければ持続しないのか、という問いである。

(受理 2019年1月3日)

(掲載決定 2019年1月14日)

²⁵⁾ 詳しくは、鶴見『ロシア・シオニズムの想像力』第3章参照。

²⁶⁾ ディアスポラ・ユダヤ社会においては軍事的な衝突は意識的避けられてきた。さしあたり次を参照。ジョナサン・ポヤーリン&ダニエル・ポヤーリン(赤尾光春・早尾貴紀訳)『ディアスポラの力 ユダヤ文化の今日性をめぐる試論』(平凡社、2008年)。